

大学生の習慣的なお茶飲みが 家族間コミュニケーションに与える影響

○木戸 彩恵¹・柏木 彩伽^{2*}・齊藤 涼^{2*}

キーワード：緑茶、家族間コミュニケーション

Effects of Habitual Tea Drinking on Family Communication Among University Students

Ayae KIDO¹, Ayaka KASHIWAGI^{2*} and Ryo SAITO^{2*}

(¹Kansai Univ., ²Fukuijuen)

Key Words: green tea, intrafamilial communication

日本人の生活に根付いてきた緑茶は、日本の伝統的な食文化の一つである。緑茶は、団欒やもてなしの心を象徴する存在であり、日本独自の文化として位置づけられている(細川, 2020)。近年、若年層の緑茶との関わり方には変化が見られ、急須で淹れるリーフ茶の利用が減少する一方で、ペットボトルなどの茶飲料への支出は増加傾向にある(農林水産省, 2024)。茶飲料は、主に喉の渇きを癒すために飲まれることが多いが、本来、緑茶にはコミュニケーションや社会的つながりを形成する役割があったと考えられる。

たとえば、東北地方の農村や漁村では「お茶飲み」と呼ばれる習慣があり、友人や隣人が集まり、緑茶を囲んで会話や情報交換を行う場として機能してきた。このような慣習は、高齢者の孤立感を軽減し、精神的健康を支える社会的資源ともなっている(松山, 2016)。

現代社会では、家族間におけるコミュニケーションの社会的・心理的価値が再評価されている。特に家族関係の希薄化が指摘されるなか、緑茶を急須で淹れて家族とともに飲むという対面的な交流の機会は、若年層にとってもコミュニケーションを促進するきっかけとなる可能性がある。

そこで本研究では、急須で淹れた緑茶を家族とともに飲む「お茶飲み」の体験が、家族間のコミュニケーション態度や情報交換の頻度、さらに緑茶に関連する主観的 QOL にどのような影響を与えるのかを検討した。

方法

調査参加者 関西圏在住で家族と居住している 19~22 歳の学生 9 名(男性 2 名・女性 7 名)

調査時期 2024 年 10 月~12 月

調査内容 調査は以下の 4 段階で構成された：(1)事前調査、(2)緑茶の淹れ方に関するレクチャー、(3)3 週間にわたる家庭での「お茶飲み」実践(週 6 日以上)、(4)事後調査。事前・事後調査では、①緑茶の飲用実態、②家族間のコミュニケーション態度(平山ら(2001)の夫婦間コミュニケーション態度尺度を修正し使用)、③情報交換の頻度・タイムリー性・正確性・問題解決(5 件法)、④SEIQoL-DW(緑茶に関する主観的 QOL)を質問紙およびインタビューによりデータを収集した。

倫理的配慮 本研究は関西大学心理学研究科倫理審査委員会の承認を得た上で実施された。研究実施に際しては、全参加者から書面によるインフォームド・コンセントを取得し、研究倫理規定に基づいて個人情報の保護にも配慮した。

結果

事前調査から、調査協力者の緑茶飲用頻度は平均 1.1 杯/週(SD=0.9)であり、緑茶を好むという事前調査の嗜好スコアに比して、実際の行動が伴っていない様子が示された。SEIQoL-index は事前 66.8 → 1 週間後 81.2 → 3 週間後 94.7 と緩やかに上昇し、主観的 QOL 向上への寄与が確認された。

質的コーディングでは、SEIQoL で挙げられた計 90 件の Cue を 7 カテゴリーに分類した。事前に最多だった「味・香り」(16 件)は 3 週後に 7 件へと大幅に減少し、代わって「抽出条件」と「器・道具」が各 20 件で最多となった。さらに、事後調査では新たに「利便性」が追加された。一方、コミュニケーションや情報交換頻度の量的変化には一貫性がなく統計的有意差も認められなかった(例：コミュニケーション尺度 事前 M=3.2, 事後 M=3.3, t(8)=0.41, ns)。しかし、口頭報告でのやり取りからは「いつもより自然に会話ができた」「母と二人でゆっくり座る時間が増えた」「お茶を淹れると声をかけやすくなった」など肯定的なエピソードが多数得られた。

考察

3 週間にわたる緑茶飲用の継続により、参加者は「味・香り」から「抽出条件」や「器・道具」へと関心を移し、「美味しさ」を再評価する過程で抽出環境が焦点化されたと考えられる。また、飲用体験の蓄積を通じて、人とのコミュニケーションや飲用環境が味覚と同等かそれ以上に重要であることに気づいた可能性が示唆された。さらに、継続的な飲用には「利便性」という現実的要因が不可欠であることも明らかとなった。「利便性」は、従来の「お茶=煩雑」という若年層のネガティブイメージを緩和する要件を具体化しているものと考えられた。今回の調査においてコミュニケーションに関する量的指標に大きな変化が得られなかった要因として、①家族構成による実接触時間の制限、②参加者の対話スキル差、③測定期間の短さなどが考えられる。それでも質的データでは対面機会と談笑が増えたことが示され、質的充実が量的改善に先行する段階にある可能性もあり得る。

調査参加者数と調査期間に限界はあるものの、本研究は味覚価値からプロセス・相互作用価値への意識的転換を示し、「お茶」という文化資源が家族コミュニケーションを再活性化化する潜在力を浮き彫りにした。今後は、家族類型別の層化デザイン、利便性向上を図る器具介入を検討し、緑茶文化を活用した実践的教育プログラムの開発を目指したい。

引用文献

- 細川裕子(2020). 大学生の緑茶の嗜好と意識, 目白大学短期 大学部研究紀要, 56, 1-12.
- 松山 洋一(2016). 現代の日本におけるリーフ緑茶の飲用理由および飲用実態. 日本家政学会誌, 67, 90-98.
- 農林水産省(2024). 茶業及びお茶の文化に係る現状と課題. <https://www.maff.go.jp/j/seisan/tokusan/cha/attach/pdf/230929-7.pdf> (2025 年 5 月 1 日取得)

付記

本研究は株式会社福祉寿園との共同研究として行われた。本研究に関して申告すべき COI はない。